

全佛通信

十月 月号
発行所 財団法人 全日本仏教会
東京都中央区築地 三ノ木願寺内
電話 03-313-3300
振替東京 3300
発行人 栗本俊道
編集者 別所弘因
印刷所 ルンビニ社

核実験再開を悲しむ

全仏教徒の声

仏教は他の宗教とともに、この ような悲しい事態が起つてはなら ないことを念じつづけ、祈りつづ けて来たのであつたが、現実は今 逆の方向をたどり不安の極みと いうべき状態となつてしまつた。 われわれは平和と幸福を願うす べての人々とともに、つくづく思 われることは、これほどに平和を 求め、これほどに共同の幸福を求 めながら何故にかも平和と幸福 に遠ざからねばならないかであ る。人間はついに平和を願うこと は不可能なのか、平和は絶望なの か。人間の無力、無能力、という ものを、ひしひしと痛感せしめら れるのが昨今である。文字通り現 代は新しい野蛮時代である。然し われわれは自分の無能無力を自 覚しつつも、平和に絶望し、絶望に 徹することが出来るであらうか、 最悪の時代であり、絶望状態であ ればあるほど我々は此の悪に対す るの反発を感じないでは居られな い、仏教徒の中にはあやまつて運 命を動論者もある、即ちすべては 宿業であるから抗し切れるもので はない、すべては仏さまだけが知 つて居る、と云う無抵抗主義、そ れは一面人生に忠実な従順な態度 の如くでもあるが、それは真に大

乗仏教に生きる姿とは云われない であらう。マハヤナ思想は他の 如何なる宗教にもまさる衆と共に 生きる精神である筈で、若し衆生 と共に生きる道が無ければ誓つて 正覚を取らじと宣言した仏は諸苦 毒の中にあるとも忍受不悔と叫ん でいる。これとき一大苦難の時にこそ 勇猛心が湧き出で、これを打開し ばならぬ。これを打ち払つてゆく心でなけれ ばならぬ。

われわれは悲しい現実には絶望す る沈痛な心を仏心によつて振り起 し、今こそ同信同明に呼びかけつ つ世界破滅の核実験再開の停止に 総力を結集すべきであらう。時に 仏教徒が核実験の再開を重視す ることは、単なる政治的かけひぎに 偏向して云うのでわらない(従来は 政治的に強く偏向した平和論者 や、原水爆禁止運動者もあつた) 核実験による放射能の被害は人類 遺伝の方則を変更し子孫生殖の道 を絶つもので、まったくこれは仏 教人生観、仏教哲理に照らして許 すことの出来ない非道であること を明記しなければならぬ。

われわれ日本仏教徒はいかなる 意味に於てもこれを傍観して居る ことは出来ない。否! 仏教徒に 於てこそ他の如何なる人道主義者 よりも他の如何なる宗教人より も、これがすみやかに停止せられ ることを叫び得る理由と根拠があ る。われわれ日本仏教徒は他の如 何なる重要な任務も中止して核 実験再開の停止に有効な働きかけ をなすべきであらう。

任期満了に伴う役員改選のためか、かねて加盟各宗派、府県仏教会、団体に対し評議員の推せんを依頼していた全仏当局では、去る九月四日午後一時より築地本願寺会議室において、新評議員による第一回評議員会を開いた。当日出席評議員数は真宗本願派仲井義照氏他九十名でこのうち四十四通が委任状であつた。

全仏評議員会開催 新会長に大谷光照師を選出

副会長、理事等 もきまる

協議の結果について報告承認を 語り、満場一致これを諒承可決し た。

会 長、大谷光照(浄土真宗本願 寺派)
副会長、古川大航(臨濟宗妙心寺 派) 清水谷恭順(聖観音 宗) 宮本正尊(学識経験 者)

理 事、来馬道断、村上道隆、芳 賀達宗、(以上曹洞) 武 田達誓、阿部慶昭、清水 祐之(以上西本願寺) 訓 覇信雄、經本壬寅、末広 愛邦、(以上東本願寺)
宮裡頭秀(妙心寺) 竹村 教智(智山) 平林宥高 (豊山) 津田実雄(高野) 野村宗春(浄土) 岩野真 雄(浄土) 山中忍海(天 台) 加賀美日聰(日蓮)

秦隆真(京都) 蒲池繁 (福岡) 倉持秀峰(埼玉) 高橋隆天(神奈川) 安藤 寿雄(新潟) 間野敬重 (大阪) 山本杉(仏婦)

長岡慶信(東仏)
監 事、藤川博(朝日生命) 木全 大孝(静岡) 采山久(仏婦)

続いて、第三項議案(その他)に ついては栗本総務局長より墓地問 題の現状につき左の各項について 報告、説明があり何れも諒承可決 され、同三十分閉会した。

(イ)口頭弁論の経過について
(ロ)神奈川県下における強行埋葬 の事例報告
(ハ)墓地問題本年度予算百万円可 決の報告

理事長就任挨拶



今や吾々 は、内外共

来馬道断

に重大な問題に直面しておりま す。緩和、国際情勢の緊張は少 しも緩みません。その他吾々に 最も身近な問題として、例え ば最近の墓地の問題、解放農地 の問題等が山積しており、これ が解決は、全仏傘下の各団体 が一致結束、同一歩調で、慎重 且つ強力に、対処して行かなければなりません。不肖私は、今 回測らずも理事長の重責を汚す ことになりましたが、希くは、 大方の御支援により誠心誠意、 願してやみません。

われわれは悲しい現実には絶望す る沈痛な心を仏心によつて振り起 し、今こそ同信同明に呼びかけつ つ世界破滅の核実験再開の停止に 総力を結集すべきであらう。時に 仏教徒が核実験の再開を重視す ることは、単なる政治的かけひぎに 偏向して云うのでわらない(従来は 政治的に強く偏向した平和論者 や、原水爆禁止運動者もあつた) 核実験による放射能の被害は人類 遺伝の方則を変更し子孫生殖の道 を絶つもので、まったくこれは仏 教人生観、仏教哲理に照らして許 すことの出来ない非道であること を明記しなければならぬ。

全仏新役員が決定

理事長に來馬道断氏

理事会で

常務理事も選出

全仏では、このほど任期満了に伴う役員改選の準備をすすめていたが、去る九月四日、かねて推せんを依頼していた各宗派、府県仏教会、及び団体からの評議員による第一回評議員会の結果選出された理事による第一回理事会を、九月十四日午前十三時三十分より左の要領によつて築地本願寺会議室において開催した。先づ栗本総務局長の開会の挨拶に続いて本会定数に対し出席十七名、委任状四通である旨報告、本理事会の成立を宣した。

続いて太田理事長より挨拶あり、新理事長の選出とその方法について語つた。

この時、長岡慶信理事より提案があり在京宗派代表として理事長に來馬道断氏(曹洞宗々務総長)を推せんし、会に語つたが、全員一致でこれを諒承、來馬氏の同意を求めたが來馬氏受諾し、ここに全日本仏教会新理事長として、來馬道断氏の就任が決定した。直ちに新理事長の挨拶あり、続いて、会長、副会長の就任受諾に關し報告があり、満場一致でこれを諒承した。

因に、会長は浄土真宗本願寺派法主、大谷光照師、副会長は古川大航師(妙心寺派管長)、清水谷恭順師(聖観音宗浅草寺貫主)及び宮本正尊(仏教学者)の各氏である。

続いて、議事は五名の理事補充の件につき八名の選衡委員が別室において協議し議事は暫時休憩に入つた。

十一時理事会が再会され、長岡理事より選衡の結果、左の五氏を選出した旨報告にあり全員異議なく諒承した。

阿部竜伝、松本徳明、塚原徳徳、岡野正道、中山理々

更に常務理事として左の十五氏を選出され諒承を得た。

訓覇信雄、末広愛邦、阿部慶昭、清水祐之、來馬道断、加賀美日聡、野村宗春、岩野真雄、平林宥高、竹村教智、山中忍海、長岡慶信、倉持秀峰、阿部竜伝、山本杉

つたが、この議案は後日の常務理事会に一任すること諒承。

なお全仏三局長はそのまま留任となり、事務総長は退任し、后任は常務理事会で決定される。最後に事務総局より諸案件の報告並に説明があり、夫々諒承可決されたがその要旨は次の通りである。

- 総務局関係**
- 1 全仏墓地問題対策特別会計の決算並に予算の報告及び説明
 - 2 在家仏教協会の本会脱会の件
 - 3 浄土宗本派執事長、全仏常務理事、千々和宝天氏逝去の件

組織局関係

核実験再開禁止について九月十三日午後三時より開かれた社会

問題委員会で決定した左の結論があつた。

1 全仏としてとりあえず、声明書を発表して仏教徒の意志表示を行う。

2 核実験再開禁止平和運動として全仏は人類の破滅を未然に防ぐため、恒久的な全国民運動にもり上げよう。

なお、この問題については、早急に常務理事会、並に各種合同委員会を開催の上別途に善処し、声明草案は事務局に一任すること諒承した。

度重なる核実験に
全仏が声明を発表

度重なる核実験に

全仏が声明を発表

全仏ではたび重なるソ連の核爆発実験に対しこれを遺憾とし、去る九月十三日午後三時より築地本願寺会議室に社会平和委員会を招集し、核実験に対する全仏声明草案を慎重に審議し、同十九日午前十時から開催された常務理事会の決定を経て同日内外に左のような声明を發表した。なお同声明は、全仏加盟宗派、府県仏教会、団体等へ流された外、駐日米、ソ、仏、英各大使館へも送られた。

声 明

我々仏教徒は仏教本来の指導理念にもつぎ、世界平和と人類幸福を願望し、国際緊張の緩和に努力して来たが、世界の情勢は希望に反して悪化の方向をたどり遂に核実験が再び行われるようになった。

国際局関係

第六回世界仏教徒会議日本仏教代表派遣に關する件について柳部長より報告並に経過説明があり午前十一時五十五分本理事会を閉会した。

なお、本理事会出席理事は左の十七氏である。

來馬道断、末広愛邦、武田達誓、阿部慶昭、清水祐之、高橋隆天、長岡慶信、岡野敬重、平林宥高、(代)、山中忍海(代)、宮裡頭秀(代)、野村宗春、加賀美日聡、岩野真雄、山本杉、倉持秀峰、阿部竜伝の各師、全仏理事長、総長

これにより放射性物質の災禍を蒙る憂いを増大するばかりでなく、度重なる実験を通じて新しい核兵器が開発され、核戦争の恐怖を益々深刻ならしめることを恐れる。われわれ日本仏教徒は政治的かけひきからでなく全たく人道の立場から、核兵器そのものに反対するものであり、核実験はその理由の如何を問わず、世界の平和と人類の幸福に対する重大なる脅威と見なすものである。従つてソ連の実験続行は遺憾の極みであるが、米国の実験再開宣言に對してもその醜意を要請するソ連は速かに核実験を停止し、国際正義と人道とによる国際秩序を打立てるべく協力せられんことを要望する。

昭和三十六年九月十九日
全日本仏教会

各局部長主事。

ミッドウエー海上で 厳肅な慰靈祭行わる

概報のハワイ、ミッドウエー方面の海上慰靈祭は七月一日夕刻、南太平洋上にて盛大且厳肅裡に舉行された。

この日旗艦あきづき上には艦隊司令三上作夫指揮の下に全員が整列し、厳肅な雰囲気裡に葬送曲が吹奏され、洋上に消えた数百万の英霊に對し敬礼をなし礼砲のとどろく中に三上司令によつて全仏大谷会長の弔辭が朗読され、ついで海中に花束、香、散華、写経等が投ぜられた。

なお練習艦隊はこのほど二ヶ月余に上る実務を終え無事帰国した。



(写真) ハワイ・ミッドウエー海上の旗艦あきづきの艦板にて行われた慰靈祭のまよう。

現代に対処する

仏教教学について(前号につづく)

元京大文学部長 原 随 園
文学博士

しかしそれほど開放されることを欲求しているものが、求めてその物質的、機械的味気ない組織の中に自らとび込んで行くのが現実の姿ではないでしょうか。サラリーマンといふのがそれである。サラリーマンとは何かというと、サラリーとは「塩」ということで、昔塩がたつとつた時代塩の値段がすべての物価の標準になっていた。兵隊に行つてもその報酬は塩であつた。それが、現物では困るので、後に塩代として給与が支給されることになつていった。本来は現物で配ばられたものが、だんだん塩代としての給与になつた。つまり、サラリーマンとは塩をもらう人のことである。だからサラリーマンとは米塩の料をかせぐために機械になることをあまみじっているわけである。

皆、競つて大学の門に押しかけ、大学に入つてどうするのかという、自分の将来を有利に決定する手段のためである。自ら決定することを、つまり機械化されることを求めて、自分の能力を商品として売り渡すことにはかならない。かくして、一方ではレジャーレジャーといつて自由と、開放を叫びながら他方不自由な束縛の機

械組織の中に自らを商品として投げ込んでいるのである。自らの生涯をその道に売り渡すことを目的として大学に行つていゝ。だから勉強などはどうでもよい、就職のために東西奔走しているのが実情であるまいか。自分をどこに売れるところか、一番高く自分を売つて、そして、課長となり部長となることを目的としている。自由と開放を求めてレジャーを楽しんでいるが、そのレジャーの根底は大資本主義で、大資本主義がレジャーを作り、ブルームの波をうごかしているのである。結局人間を自由に開放しようとしてレジャーを楽しみながらやつぱり、大資本主義の機械組織の中に流れ込んでいく。自由と束縛とが同時に悪循環をくり返しているのが現実の姿であると思う。かくの如く人間は、どうすることも出来ない決定論の中で生活しているのであるが、然らば、只この決定論のみで生きられるかどうかといふに決してそうではない。人間にはエスプリ、即ち、創造力というものがある。生産の方法が如何に改良されるかというのを考へ実行するのはやはり、創造の力をまっぴろげない。真実の歴史の姿は決定論と自由論とがあいまつてはじめて動いている

ものである。それ故、決定論が最も正しいということも誤りであるが、人間は本来自由なんだということも誤りである。仏教では、因縁といふことをいうけれど、正しく歴史は因果の道理にしたがつて動いている。こうすればこうなるといふことは、はつきりした事実である。しかし、人間の生活の中には、はつきりとりわり切れない事象もある。社会といふ共同体の中では、共同の責任といふものがあつて、自分の知らないうちに、時代や、社会の影響を受けていることもある。マルグブルグといふフランスの歴史学者は、「われわれは、祖先に似るよりも、より多く時代に似ている」といつた。われわれの性格は、祖先に似てゐるのは当然であるが、より多く時代に似るといふのは、気がつかない間に間接の縁によつて同じ国に生れるとか、同じ時代に生を受け、縁によつてわれわれの生活は生起してゐる。仏教の考え方は非常に深い人間の実相を掴んでゐるものと思う。又、決定してゐるものによつて動いてゐるのではなく、自由によつて動いていくのだが、その自由も、単なる自由ではなくして、前にあつて、それをそうさせるところのものが決定してゆくので、これが宿業の観念である。つまり、われわれは、しぼられながら、新らしいものを造り上げてゐる。そしてその造られたものによつて又しぼられていくのである。例えば、法律といふものは、人

間が作ったものであるが、その法律によつてわれわれは縛られてゆかねばならない。人間は作りながら作られしぼられてゆく。だから法律は一たん作られたら永久不変のものであるかといふに、勿論そういうものではない。人間が生きて進歩し、社会も人間と共に動いてゐる以上それを規制する法律も又、改廃されるべきものである。それが人間の自由の精神である。現実の生といふものがそういう面をもつてゐるのである。仏教において真俗の二諦を説くがこれは、真実を理解する道と、現実に処する道を教えたものと考へる。われわれは先づ、真実をよく理解すること、そして、現実に処して、実践すること、それが教へであると思ふ。大僧正慈円が「世の中は、道理が支配する。道理には妙見の道理といふものがある」と申してゐる。妙見の道理とは、人間の感覚で触れることの出来ない世界、即ち超越的絶対者と触れあう世界を指したものであらうと思ふ。神代の時代にはこの妙見の道理が自ら行われていたといふ。所謂、世を下るにしたがつて、妙の道理がだんだん衰えて、人々は妙の道理を信じなくなつた。そして、見の道理のみが行われるやうになつた。その見の道理も、昔は聖人賢人がこつこつといふやうに人々はなる程と、素直にその道理に従つた。けれども世が下つてゆくと共にその聖賢の教えといふものはきかれなくなつた。そして、政治的権力を握つてゐるもの、実力者がこうだといへば、それが道理として通つてゆく、けれども現在には、そういう政治的力をもつてゐるもの、道理をえ行われぬ、無道理な時代となつたといふのが、末法思想ではあるが、事實でありましよう。現在は正しい妙の道理などは地を払つてゐる。無宗教の生活といふものが正にそれであると思ふ。それなら見の道理はどうかといふのにこれ又はつぎりしない。各々自分の立場からのみ、すべてを反駁してゐる。そのよふな人間は理性的であると同時に非合理的なものである。ルソーはこゝろいつてゐます。一人間の科学知識は進歩する。しかし、人間の芸術、道徳はだんだん退歩する。つまり、知識は次から次へと発展して行くものである。それを人間は文明になつたといつてゐますが、道徳や芸術は一向に進歩しない。これが人間の知識と智慧、つまり、ノリツジとインテリジェンスの違いではないでしょうか。一方はどこまでも前進してやまぬものが、スペインのオルテガといふ人は「現代は新らしい野蠻時代である」といつてゐますがまことに真実を穿つた言葉であると思ふ。知識は進んで原子力も發明、発見される時代ですが、その原子力によつていつ人間は、全滅するかわからないといふ不安に戦つてゐるのが現状で、これ即ち、新らしい野蠻時代といふゆえんであります。核爆発を無制限にすれば、人類は滅亡するのであるから核戦争な

ど起らないだろうと、たかをくくつていても、戦争が起れば人間の非合理性というものはいつ、どう変わるかわかたものでは無い。日本が第二次大戦に敗れた原因も、その非合理性の爆発によつて行なわれたのであるそんなことは人道によくはないという事はわかり切つてゐるのであるが、あえてする、そういうものを人間はもつてゐるのである。これが人間の非合理性である。

知識はどんどん進むけれども道徳は進まないという事はどういふことかという、前者は人間をひろめる方向であるに對し、後者は人間を深める方向なのである。この両者が平行して進んでゆかなければならないという事は知識の面では了解してゐるのであるが、現実においてはやはり、知識の面だけが独走するのである。いかなる時代でもこの両者は平行しなければならぬ筈のもので、人間が人間として正しくあるべき姿を掴むという事は、お釈迦さまの時代から現代に至るまで、人間として最も必要な反省の方向でなければならぬ。ところが、人間の反省というものは、知識さえ進めば、文明になり、文明にさえなれば人類の欲求の全部が満足される如く妄認して、人間自身、自分自らを如何にして深めるかということについては、すこしも考えないものである。

きり認識し、その上でどうしたらその非合理的なものを克服して、合理的なものに進みゆるかということを考えていかなければならぬのではないだろうか。それには、仏教の歴史において夫々発展段階があつたように、社会の事情をよく洞察し社会の实情に即して進んで行くのがよいのではないだろうか。

しかし、考えねばならないことは、宗学などにいわゆる伝統が出來てしまつてゐることである。観念的研究は大変進んでゐるのである。観念的研究は、現実の生活から遊離して空疎なものとなるのである。それは正しい、それは正しいくないという論争ばかりやつてゐて、それが真実の停滞してゐる原因ではないかと思ふ。すぐ異安心というようなことをいわれるけれど、だから真宗のほうの方で宗学の研究をするものが少ない。原始仏教だとか、逸に角宗学と関係のないようなものを研究してゐる。あれだけの学者がゐるのだから、ほんとに必要な真宗学なら、しつかりとやつてくれたらと思ふのでありますが、うっかりやると異安心でやられるから、したがつて、そおいう危険のない安全地帯で研究をやつてゐる。そんなふうには私には思はれる。やつぱり、仏教においては事理相応した実践ということが必要ではないかと思ふ。

の真宗寺院に指令を出して、一定の時刻に鐘をならせさせる。つり鐘も百貨店や、梵鐘屋にある時は商品です。だが一旦それが寺におさまつたからは商品ではない。又商品であつてはならない。それは法器である。法器とは宗教行事を行つて神聖な道具で、裝飾品ではない。寺につつてある梵鐘が裝飾品なら、そのようなものをぶら下げておく必要はない。

私は寺院に住む宗教家が、自分の道場において現実と仏と共に生活してゐるのであるという自覚と実践をもつことが大切なことではないかと思ふ。

今や、この世界は意識するとなしにかかわらず唯物論的なものに支配されてゐるのであります。自由という名のもとに我見、我執が横行してゐる時代であります。自己の生命のよつて來るところの深いことを知らず、他人の生命の尊重すべきことを知らない。現うな、そういう生活をしてゐる現代に最も必要なことは何であるかといへば、それは、われわれ自身、その宗教的実践を實踐する以外に道はないのではないか。その宗教的実践とは何であるか、それは、自分が仏と共にある、自分は仏になるのであるという自覚をもつて、夫々の寺院道場に修行することこれでありましよう。

一つだけなら聞いたことが身体に止つてゐることが、二つあるので一方から入つたことが、一方に逃げたものであります。が、およそ、觀念の世界というものは、ナンセンスである。宗教の眞実をほんとに自身自身につけてこそ、始めて私は意味が出て來るものと思ふ。

私が総長にそういつたのは、手近かな、卑近な所からふみ込んで行くことによつて、道が開けてくるのではないかと思ふからである。

それを考へて始めて、かのシュバイツァがいつたように、倫理的なもの、誠実なものを説くのは、それがなかつたら現代の文明が支られないという事を痛切に感じているからであると思ふ。

そのような倫理や、誠実の底にあるものが、私は宗教的なものであると思ふ、それは一言にしていへば「絶対者と対決するものを持つ」ことであると思ふ。

私は新しい宗門人を養成する教育、或は教学の面におきまして、逸に角もつと実践ということをやかましくし、現実の場に妥当するものとしていくことが現代の宗教者に課せられた最も痛切な課題ではないかと信ずるものであります。

御精神に深く思いをいたし、現代をよりよい世界にし、一步でも非合理的なものを克服して合理的なものに化してゆくよう実践して頂きたいと念願しやまぬ次第であります。(以上)

観世音菩薩像

ハンガリヤ仏教会へ

かねてからハンガリヤ仏教会(会長アーネスト・ヘテニイ氏)の要請によつて全仏を通じて贈呈することになつてゐた聖觀世音菩薩像一軀は、その後送付方法で苦慮してゐたが、このほど来日中のウイーン仏教会長フンガー・ライダー師と話し合ひがつき、同師の扁函に際して託送してもらつたことになつた。なお提供元の国際平和觀音靈仰會(会長古川為三郎氏)では同會の大塚道光師が過日F・ライダー氏と面會し、次回ウイーン仏教会へ贈る觀世音菩薩像の件についても懇談し受入れについて同氏の諒解を得た。

故セイロン首相を偲んで

大使館で追悼式

昨年不慮の死をげたセイロン首相故バンダラナイケ氏をしのんで、九月二十六日午後四時四十五分東京神田のセイロン大使館でしめやかな追悼式が行われた。式はフオンセカ大使の発声で二分間の目禱が成され、ついで野田卯一日本セイロン協会々々長、岩本勝俊最乗寺貫主、らの順で次々に追悼のことばがのべられ、終つて大使の答礼があり、出席者全員が焼香して閉式となつた。なお全仏からも柳部長、鎌田主事が参列した。

全仏顧問、参与さるる

第一回 常務理事会開催さる

新事務総長に白山亮一氏

全仏の新任常務理事による第一回常務理事会は、九月十九日午前十時より東京築地サボイで開かれ、左の議題について夫々協議された。

先づ未決定となつていた後任事務総長に白山亮一氏(大谷派宗会議員)が決定した旨報告され承認された。なお終つて白山新事務総長が、就任のあいさつをなした。なお当日の出席者は、左の十名で委任状は五名であつた。

出席者、来馬道断、倉持秀峰、末広愛邦、山本杉、平林宥高、岩野真雄、白山亮一、阿部竜伝、野村宗春、清水祐之の各氏、全仏各局長、部長、主事

1、各種専門委員選出に関する件
各種専門委員会の存続については意義なく承認され、その委員の選出については事務当局で案を練り、改めて常務理事会に上程することを決議承認した。

2、核実験再開禁止に関する件
この発表に関する件
これは、かねて全仏社会問題委員会において決定をみた核実験再開禁止に関する仏教徒としての声明文を当局に一任せられていたもので、声明文について野組織局長より説明あり、時を移さず本声明文(別掲)を全仏傘下各宗派団体等に配布することを決定承認した。

3、第六回世界仏教徒会議派遣、日本代表に関する件
石川国際局長不在のため、代つて柳部長より説明があり、カンボヂヤの招請先より正式代表三

名の通告について、その選衡方法に関して詰つたが、結論として更に一層具体的な回答がカンボヂヤ当局より来るのをまつて改めて常務理事会にかけることと承認決定した。

なお、その他の議題として左の二項が協議決定された。
1、先づ顧問、参与の件
二項が協議決定された。

大谷光暘、椎尾弁匡、長井真琴、高階雅仙、増田日遠、岸信宏、鶴昌清、小野清一郎、石橋湛山、松村謙三、正力松太郎、山田日真の各氏 以上
2、またの参与には左の十六名が決定した。

大谷登潤、草葉隆円、大谷よし雄、安藤寛、北島教真、中野文義、小柳牧衛、赤松常子、前田義雄、田中栄一、清沢俊英(以上衆参両院議員) 佐々木泰翁、友松円諦、太田淳昭、大村仁道、渡辺真海(以上前理事長及事務総長)

二、英文仏教百科辞典の件
これは資金難のため鈴木財団に任せる話があるが如何にしたらよいかという提案がなされたが鈴木財団との具体的条件等について全仏理事長、西義雄氏、阿部竜伝、栗本局長、中山理々氏等が財団側と話し合いをした上で改めて常務理事会にかけ協議することと承認した。

以上をもつて常務理事会を終了し平林宥高、野村宗春の両常務理事が当日の署名委員となつた。

第六回世界仏教徒会議

日程 きまる

十一月十六日(木) 午前八時 着座会議
十一月十七日(金) 午前八時 午後八時 午後閉会式
十一月十八日(土) 午前七時 午後三時 各国代表王室にて国王妃殿下に接見、王宮訪問、シルバールゴダにて記帖。
十一月十九日(日) 午後三時 国立博物館、大仏塔等参詣
十一月二十日(月) 午後五時 カンボジア仏教主催お茶の会 於ホテル「ロイヤル」
十一月二十一日(火) 午前七時 シエム・ラップ観光に出発
十一月二十二日(水) 正 午 コンボンチャム州知事主催昼餐会
十一月二十三日(木) 午後八時 アンコールワット観光
十一月二十四日(金) 午後八時 シエム・ラップ知事の晩餐会

第六回世界仏教徒会議の日程がこのほどビルマの世界連盟本部から送られて来た。日程は左の通り
十一月二十二日(日) 午前七時 ラヂオ等で大会開幕の通報
十一月二十三日(月) 午後八時半より 仏教賛歌、開会の辞、メッセーヂ披露等
十一月二十四日(火) 午後四時より 宗教大臣、仏教会長、世界連盟会長の演説、大会委員選出
十一月二十五日(水) 午後八時より 宗教大臣主催晩餐会
十一月二十六日(木) 大会々場にて着座会議
十一月二十七日(金) 午前八時 午後閉会式
十一月二十八日(土) 午前七時 午後三時 各国代表王室にて国王妃殿下に接見、王宮訪問、シルバールゴダにて記帖。
十一月二十九日(日) 午後三時 国立博物館、大仏塔等参詣
十一月三十日(月) 午後五時 カンボジア仏教主催お茶の会 於ホテル「ロイヤル」
十一月三十一日(火) 午前七時 シエム・ラップ観光に出発
十二月一日(水) 正 午 コンボンチャム州知事主催昼餐会
十二月二日(木) 午後八時 アンコールワット観光
十二月三日(金) 午後八時 シエム・ラップ知事の晩餐会

十一月二十日(月) 午後四時
コンボンチャム町区内観光、終つてブノンベンへかえる
十一月廿一日(火) 午前中 自由
午後三時より
メナム河の水まつりに出席
十一月廿二日(水) 外国代表帰国
なお右大会派遣日本仏教代表の選衡委員会は近日中に開催されることになつたが、インドにおける仏跡巡拝の一切の世話をする、インド六菩提会事務総長D・ヴァリシハ氏からは、日本代表を心から歓迎する旨の書面がすでに全仏国際局へとどいてる。

台風御見舞い

このほど中部日本を縦断して各地に大きな被害を与えオホーソク海に消滅した「第二室戸台風」は、高野山、比叡山等の各宗大本山をはじめ各寺院等にも甚大なる損害を与えたが、全仏事務総局役員一同、一日も早く復旧され旧来に勝つて為法に御精進されんことを乞願し、茲に本紙上を以つて謹んで御見舞申上げます。

社会問題委員会開催

世界人類を恐怖と不安のどん底におとし入れた米、ソ両国の核実験の再開に対し、仏教徒の立場から停止を要望するため全日本仏教会では九月十三日午後三時より築地本願寺会議室において社会問題委員会を開いて対策を協議した。その結果、これが停止要請は仏教の根本理念たる因果律の上から見ても遺伝的に子孫に影響する被害の甚大なる事を思い、仏教徒はこれを停止せしめ、禁止せしめるため永久的、且つ強力なる平和運動を展開すべきである、との結論に達し、その方法について委員会では近來まれにみる激論が斗わされた。

しかし仏教徒の平和運動はあくまでも人道的、道義的観点に立つて推進すべきであり、政治問題に巻き込まれてはならないという点で一致を見、とりあえず声明文を發表することを決議した。

この決議は事務当局より社会問題委員会決議事項として過般ひらかれた常務理事会に報告された。なお当日の出席委員は左の各氏である。

松本徳明、安藤寛、浜田本悠、吉田敬直、堤敏郎、徳沢童潭、太田理専長、大村総長、狩野、栗本両局長、別所、柳、吉井各部長 以上

音楽による伝道を!

△レコード 三五〇円
「あゝこのよるこび」裏面「のりのみやま」
△仏教徒の旗
中型 三・五尺×二・三尺 三九〇円
小型 一・八尺×一・二尺 一〇〇円
△輪袈裟(全仏制定)
上 一、〇〇〇円 並一五〇〇円
△全仏通信つづり(美麗、便利)
(パツチファイナル)
一部 二〇〇円
以上いづれも送料共
御申込みは
全日本仏教会へ
振替 東京三六〇〇番
電話 東京五局 三三番

沖繩の仏教事情

強い創価学会の勢力

那覇市長からメッセーヂ

沖繩仏教事情の調査と慰霊法要
旁々各学校及び社会福祉施設視察
の目的で八月中旬沖繩を訪れた真
言宗豊山派仏教青年会星野有清氏
と錫尼秀氏の兩名は、八月廿七日
空路NW機で帰国し、九月五日全
仏事務局へ帰国の挨拶少々報告の
ため来局した。

それによると現在の沖繩の仏教
界の活動情況は全たく停頓状態
であり、布教師の数はきわめて少
なく二、三を数える程度であり、全
島に二十六ヶ寺院(真宗、浄土
宗、古義真言宗、日蓮宗)がある
が、仏教連合会のような総合的
なもの意志の疎通を欠いており
結成されては無いと云うこと
である。そのため現在創価学会の侵
透勢力は非常に強力なものになり
つつあり、特に若い層への働きか
けは大きいと云うことである。し
かし各寺院も本土の仏教界との交
流を熱望しており今後の相互交
流を熱望している。星野氏ら
は八月廿一日那覇日本政府南方連
絡事務所を訪れ米島の挨拶をな
し、全仏会長のメッセーヂを手に
し、ついで琉球政府行政主席大田
政作氏、那覇市長兼次佐一氏米國
民政府高等弁務官キアラウエイ中
將各氏に面会し豊山派錫管長及全
仏会長のメッセーヂを手交し種々
懇談した。廿三日には沖繩遺族会
の案内にて目下那覇市首里に建設
中の平和観音建設地へ赴いた。こ

れは山田真山画伯の提唱によるも
ので物故沖繩住民の霊を慰め併せ
て世界平和を実現する意図のもと
に企画されたもので世界一の巨大
な銅像にする。銅像は一
九六四年迄には完成する予定で開
式には本土から高僧を招いて行
いたい意向であるとの事である。
もあれ沖繩仏教界と本土仏教界が
日航機の就航が決定された今日一
層交流を密にし、共に為法に尽力
することが切望される。なお全仏
会長あてに那覇市長から左のメ
ッセーヂが託された。

メッセーヂ

御懇切なるメッセーヂを頂き有
難く拝受致しました。
このたび真言宗豊山派仏教青年
会代表の方々が沖繩にまでお越し
下さいましたことに對し心から歡
迎いたします。

忌むしい戦争の傷痕もどりやら
癒えて八十万国民平和を渴望し復
興の意欲に燃えてここに十六星
霜、同胞の物心両面に亘る御支援
御援助によりまして今日に觀るあ
る程度の復興を致して参りました。
特に那覇市街は一本一草にいた
るまで灰燼と化し戦争は破壊と文
化の後退をもたらすのみで、地獄
絵さながらの觀でございました。

幸にして次代の大黒柱たる青年
会代表を派遣せられ沖繩の現地を
つぶさに調査されるにあたり多大

なる成果と将来の指針を得られる
ことを望み、又私達もそれに対
しまして協力を惜しまないものであ
ります。

近代の物理科学がそれを用いる
人によつて如何に幸、不幸をもた
らすものであるか、私達は生命科
学もそれに並行し向上して行かな
ければ真の平和は訪れないものと
確信致すものであります。

沖繩のこの孤島に二百数十ヶ所
の慰霊塔があつて三十万人の霊を
なくさぬ戦争を再び繰返すことな
く平和発祥の地たらんと同胞の皆
さんと共に相提携していききたい所
存であります。

これを契機に今后共よろしく御
願ひ申上げ、御貴殿の絶体なる幸
福と御繁栄を祈念致しまして御挨拶
いたしました。

昭和卅六年八月廿三日
那覇市長 兼次 佐一
全日本仏教会
大谷 光陽殿

渡米宗教視察団

十月廿七日出発に決定

概報の米国における宗教事情を
視察する日本宗教界代表団は仏教
界より全仏前事務局長、東京都議
会議員大村仁道師、浄土真宗本願
寺派宗議員高辻惠雄師をふくめ
て計十一名となり航ける十月廿七日
午前九時羽田発日航機にて出発す
ること決定した。一行のうち五
名は米国よりの帰途中南米各地を
経てブラジルへ入国し、宗教事情
をつぶさに視察して来ることにな
つてゐる。

なお本通信前月号に仏教界代表
高辻惠雄氏の氏名が欠除され、ま
た代表五名となつてをりましたが
誤りですので訂正いたします。

ダンマパーラ百年祭

インド大菩提会の偉大なる創設
者アナガリカ・ダンマパーラ師の
生誕百周年記念祝典が一九六四年
にインドを中心にセイロン等で盛
大に挙行されることになり、ダン
マパーラ師のおいにあたるアヌル
ダ比丘がこのほど来日し、同祝典
に日本仏教徒の強力な援助を希望
し過日全仏事務局を訪れ柳国際部
長と懇談した。全仏としては国際
委員会等に諮つた上で出来得る範
囲で協力したいとの意向である。

強い仏教に対する関心

阪東性純氏英国から帰る

若き仏教徒として将来を大いに
期待されている阪東性純氏(東大
印哲科卒、東京都台東区北清島町
真宗大谷派報恩寺)は去る八月二
十三日約一年の英国留学を終えて
帰国したが、ヨーロッパ特に英国
における仏教に対する関心の深さ
には非常に驚ろくべきものがある
と云う話を寄せている。それによ
ると阪東氏の留学したオックスフ
オード大学のある町にも仏教会が
あつて中心となつている人々は殆
んどが若い人がこれに當つてを
り、週一回有名な仏教学者を招い
て講演会などを催している。と云
う。また氏はキリスト教の環境の
中で育つたと云われる一学生と合
い種々対談したが、カトリックの
いわゆる極度の厳格さと形式主義
に強い反感を感じたその学生は、
たまたま鈴木大拙博士の「禪」の
本を読んで仏教に関心をもちはじめ、
どうしても日本へ行きたいと
云つていたという。いづれにして
もヨーロッパ各地における日本仏
教特に禪に対する関心は、ただ単

に東洋ブームの時代と云うことば
では表現出来ない真摯なすごさ
を持つものと云えるだろう。

千々と宝天師逝く

九月二日午後四時過ぎ総本山知
恩院山内源光院にて胃ガンのため
遷化された。師は浄土宗本派総本
山知恩院の執事長の要職にありな
がら全仏常務理事、並に同関西事
務局事務局長を歴任され、特に昭
和三十四年十月知恩院にて開催さ
れた第七回全日本仏教徒会議の際
には率先してことに當り、一千名
に上る代表に対して種々便宜供与
されるなど全仏の諸行事にはす
んで協力を惜しまず、日本仏教界
に尽された功績はまことに大なる
ものがあつた。総本山知恩院の告
別式は八日午前十時から山内阿弥
陀堂で行われ全仏も弔電をおくり
師の冥福を祈つた。享年六十五
才。

あとがき

▲ 人類の平和への悲願をよそに
核実験は容赦なくつづけられる。
我々仏教徒は政治的にでなく真の
仏道精神を以つて、核実験禁止運
動を呼びつづけねばならない。
▲ 理事会で新会長、理事長、総長
評議員、常務理事、理事等決定さ
る。全仏の行く途上には難問題が
山積しているが、捲土重来新役員
の手によつて着々と解決して行く
覚悟である。
▲ 墓地問題行政訴訟の口頭弁論
は九月四日で打切りとなり、結審
を待つばかり。一層の御支援をお
願ひします。▲ カンボジアの世界
会議も最近か、国際局はその準備
に大奮。(T・K生)